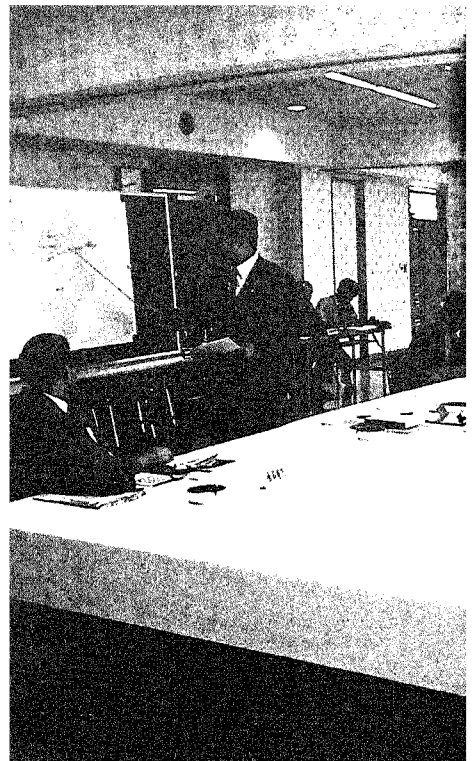


21世紀のつるを語る会

国井氏
私が大学に入った頃、ちょうど大学紛争が在りまして、都留に帰って演劇をやっていたことがあるんです。その時の劇団の名前が「祭り」だったんです。街の活性化に、若者が何か出来る場はないかと二十人ぐらいで、三回公演をしました。世間から見るとは、とても冷やかでした。その時持っていた「世界」と言うのは、今になって見ると「若者達が自分達で街を創って行こう」という時代が、いよいよ来たのかなという気が



自らが行動する時代

ついていたポテンシャルとしての織物が失われつつある。織物の活路を見出す為いろいろな策を講じているようですが、新しい目で物を見てゆく事が必要な気がします。

がします。高度経済成長時代になって若者の流失が続く、御輿の担ぎ手もいなくなり、町や村に残る伝統的なものが、経済的な利益をもたらさないということ、若者を含めて見向きもなくなりました。ところが低成長時代になって「我々は、何の為に生きているんだ」ということに気がつき始めた。例えば、一村一品運動とか、いろいろなイベントをして、その町のイメージを創って行く時代になってきた。そういうものを大学時代に目指した。しかし、都留の人心と言いますか、保守的と言いか、余り変わることを好まないと言いつつ体質があると思えます。大月や富士吉田に比べても急激にものが変わることになかなか手を染めたがらない土地柄、それがいよいよ落ち込んで来て、何かしなければ

ばいけない、そういうものが若者を含めて出てきたんじゃないかと期待を込めて見ている。

イベントをするにも、たんなる商業的な論理で進めると長続きしないで、いづれは廃れてしまう。それを本心に作っている、支えている人達の心の持ちようだと思う。その人達が本心にこれをして皆に来て貰いたい、しかも楽しんで貰いたい、こういう気持ちが無くなかなか難しいだろうと思います。

二十一世紀へ向けて！

川上氏
二十一世紀に向けて、都留の市民性、歴史、文化、自然等を含めてどのように考えているのかお話を伺います。

養老・保養施設の設置

峰岸氏
先程も言いましたが、東京から車で旅行に行くには、東海道方面のようにあちこちが混んでは駄目ですね。関越方面は、高速道路が出来たから、かなり遊びに行く人もいます。うですが、温泉場は、二・三時間走らないと着きません。

そうすると、都留のように、東京から一時間位でこれるところは、魅力がある。養老保養センターのようなものを作って、送迎バスで人を運ぶ。東京の人がPRすれば、お客はかなり引けると思います。運営は第三セクター方式がよいように思います。

それと林野庁で全国百二十カ所を指定し、山林の有効利用を考えているようです。こういうものに乗るのも良いかと思えます。

刺激を求めて、行動する

西室氏
都留の人は、おとなしくて保守的だ、確かにそうは見えますが。

人間は、自分がやっていることは非常によく分かるんです。逆に言うと、それをどのように変えることが出来るのか、その難しさもよく分かる。新しいことは、見たことも、触れたこともない、だからやり難い。世の中が変わらない、変えたくない理由は、自分のことを良く知っている人に限って駄目なんです。そういう意味で人間が一つ前に進む為に、何が必要かと言うと、刺激です。要するに、

座談会をされると言われると、勉強もしてくる、情報も集める。そうすると何かアイディアが出てくる。それじゃやってみよう、行動に移る訳なんです。

市が何かの施策をするときは、皆がこれをやれば大体うまく行くなど、思うような物を狙ってやらなければ駄目だと思ふのです。

今流行の、二十一世紀ビジョンとかよく作りますね。これは何処でもうまく行っていないようです。例えば、そこに居る会社の社員でもそこで何をしていいのかわからない。やっている本人も歌で歌って中味がないかもしれないと思っているかもしれない。

そういう物だと、世の中うまく行かない。自分の手作りの部分があるとか、自分の手で触れてみる、ここを変えるのに自分も参加出来る。そういうことが大事だと思います。市民が参加し、自分でも何か出来る、そういう物を見せないと市民は動かないです。俺は何に参加出来るかな、これなら参加出来るかな、そう思わせることが、市を良くして行く、新しい市を創って行く一番大事なことだと思います。